View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by University of Toyama Repository

ネガティブな反すうと自尊感情および自尊感情の変動性との関連

綿谷日香莉・石津憲一郎

富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要 教育実践研究
第９号　通巻31号 抜刷　　平成26年12月

富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要 教育実践研究 No.９：125－131

ネガティブな反すうと自尊感情および自尊感情の変動性との関連

綿谷日香莉・石津憲一郎

The relationship among Negative rumination, self-esteem and stability of self-esteem.

Hikari WATAYA, Kenichiro ISHIZU

キーワード：ネガティブな反すう，自尊感情，自尊感情の変動性
Keywords：negative rumination, stability of self-esteem, self-esteem

問題と目的

近年，私たちの生きる現代はストレス社会と言われ，うつ病患者や自殺者の数が増加し続けている。警視庁のまとめによると2012年の日本の自殺者は27,858人であり，毎年３万人近くの人が自らの命を絶っている。行政による新たな対策や試みは行われているが，依然として多様なストレスに対応しながら，私たちは生活していかねばならない。特にストレスの原因になっているのは人間関係によるもの（及川・林，2010）だが，そうした悩みは，根源的な解決が困難であり，長期間そういったストレスから解放されないことがある。しかし，嫌なことがあったときにずっと悩み続ける人とそうではない人が存在する。では，抑うつ状態が持続する人と持続しない人との間にはどのような違いがあるのだろうか。

松本（2009）によると抑うつの持続には，反応スタイルという抑うつ気分について考える反すう（rumination）と抑うつ気分をほかのことによって紛らわす気晴らし（distraction）の影響が確認されている。反すうとは，研究者間においてその定義が一様ではなく，様々なものが存在しており，反すうの内容にこだわらずに定義しているものもあれば，ネガティブな事柄に関する反すうに限定して焦点を当てているものもある。本研究においては，抑うつに関連があるとされているネガティブな反すうについてみてみることにする。

ネガティブな反すうとは，「その人にとって，否定的・嫌悪的な事柄を長い間，何度もくりかえし考えること」と定義されている（伊藤・上里，2001）。伊藤・上里（2001）によるとネガティブな反すうでうつ状態の程度が予測可能なことやネガティブな反すうを行うことにより，うつ状態が引き起こされるという結果がでている。このような抑うつという観点からも近年ネガティブな反すうというのが注目されている。

ネガティブな反すう傾向による立ち直りの違いを見た研究には以下のようなものがある。樋口（2008）によると，ネガティブな反すう傾向が低い者は，ネガティブな出来事が起こった際，一時的に適応状態から悪化しても，“自分はやればできる”“自分はこのままでもいいのだ”などというように自分に肯定的な評価を与え，自信を見出すことで，社会的に元の良い状況に立ち直ることができると示唆されている。このように考えると，ネガティブな反すうにとらわれにくい者は，肯定的な自己評価を取り戻していく道筋を自ら見つけていける者であると考えられる。また，Raes（2010）は，抑うつ状態を低減させる一つの指標として，self-compassion（自己への慈しみ）をあげていることからも，自分をいたわり，自分を大切にしようとする動機もまた，抑うつ状態からの脱却を支える方向で作用するといえる。

さて，こういった自己に対する肯定的評価やポジティブな感覚の一つは，自尊感情という側面から検討されてきた（Baumeister, 1998）。市村（2012）はこの自尊感情のことを「感情的な側面を含んだ自己に対する肯定的な評価」と定義している。自尊感情と精神的健康との関連は，非常に多くの研究が蓄積されてきたが（北村，2011），その一方で，高い自尊感情と最適な自尊感情が異なる可能性も指摘されている（Kernis, 2003）。実際に，高い自尊感情が社会適応を阻害する可能性も指摘され，測定されている自尊感情には，その安定性や病的な意味での自己愛を統制しきれていない可能性も考えらえる（Baumeister & Bushman, 2000）。また，近年の研究で自尊感情が高い者の中には怒りや敵意を抱きやすい者がいる等の否定的側面が報告され（Kernis, Grannemann & Mathis, 1991），自尊感情はその高さだけではなく，変動性を含めた研究が行われている。本邦においても，自尊感情の変動性においては男性で自尊感情が低く安定している人や，女性で自尊感情が低く不安定な人が被害妄想的観念における苦痛度が高いこと（諏訪・緒賀，2012）や自尊感情の変動性が高いほど自尊感情が不安定である（市村，2011）ことなどが報告されている。

この自尊感情の変動性に焦点を当てた場合，青年期は

自己像が不安定になりがちで，相対的に頻繁に自尊感情の変動がみられる（Adolson & Doehrman, 1980）。ではこういった自尊感情やその変動性と，ネガティブな反すうには何か関係があるのだろうか。齋藤•今野（2009）は自尊感情が危機に瀕した際に生じる感情に伴って，ネガティブな反すうが生起する可能性を指摘している。そこでは，自尊感情が脅威に陥った際に生じる感情として，羞恥心，罪悪感，妬みの3つの自己意識的感情に着目し，ネガティブな反すうとの関連を検討した。その結果，羞恥心と妬みがネガティブな反すうと関連していることが示され，中でもネガティブな反すうと最も強く関連していたのは妬みであることも示されている。しかし，直接的に，ネガティブな反すうと自尊感情の変動性を扱った研究は見当たらず，抑うつに大きく影響を与えるネガティブな反すうと，自分に対するポジティブな感覚である自尊感情，および，その変動性を検討していくことには依然として大きな意味があると考えられる。ただし，思春期か青年期を対象とした縦断研究によれば，自尊感情の低さは抑うつに影響を与えるが，抑うつは自尊感情の低下に影響しないことも示されており，そのプロセスでは反すうが仮定されている（Orth, Robins, & Roberts, 2008）。また，上述の斎藤・今野（2009）によれば，自尊感情が脅威に瀕した際に，反すうが生起する可能性が指摘されているため，自尊感情が低下すると，ネガティブな反すうにつながりやすいと考えられる。また，自尊感情が低下した場合，それを高めていこうとする動機が働くと考えられるものの，先行研究を概観すると，自尊感情とその変動性にはほとんど無相関であることも知られている。したがって，自尊感情と自尊感情の変動性が，ネガティブな反すうに与える影響については探索的に検討することとする。また，これらの関連性について，縦断的に検討を行うため，本研究では2週間の期間をあけ，2回の調査を行うという短期縦断的な計画を用いることとする。

本研究の仮説2つをあげる。(1) 自尊感情の変動性が高いとネガティブな反すうを引き起こしやすいだろう。(2) 自尊感情が低いとネガティブな反すうを引き起こしやすいだろう。

方法

調査協力者

北陸地方の大学の学生249名(男子109名, 女子140名)である。そのうち，記入漏れがあったものを除き，2回の調査の両方に協力していただいた187名（男子77名，女子110名）を分析対象とした。平均年齢は19.48歳であった。また標準偏差（SD）は，1.37であった。

測度

フェイスシート（Time1,Time2）：年齢，性別と，2回目の質問紙と回答者を一致させるために，携帯番号の下4ケタと名字のイニシャルの記入を求めた。携帯番号とイニシャルは1回目の調査と2回目の調査の結果を照合するために用いた。

なお本調査の実施にあたり，質問紙への回答は強制ではないこと，個人は特定されないこと等を明記した。

Time1とTime2では以下の尺度を使用した。

① ネガティブな反すう傾向尺度（伊藤・上里, 2001）

ネガティブな反すう傾向尺度は全15項目からなる伊藤・上里(2001)の作成したものを用いた。「ネガティブな反すう傾向」と「ネガティブな反すうのコントロール不可能性」の2因子から構成されており，6件法での評定を用いた。回答方法は,各項目につき「あてはまる」「少しあてはまる」「どちらかというとあてはまる」「どちらかというとあてはまらない」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の6件法で，それぞれの得点を「あてはまらない」を1点,「あてはまる」を6点とする1－6点とした。その合計得点が高いほどネガティブな反すうをする傾向にあるということになる。そして，項目の最後に「あなたがよく考える「嫌なこと」がありましたら，その内容をごく簡単で結構ですので記入してください。」と記し，該当者へ記入を求めた。その際，死んだ人や犬のこと，自分以外の人にしくまれているや自分以外の人に追われているなどの記入があった者は強迫性障害や外傷性ストレス障害などに該当する可能性があるとして，調査対象から除くことになっているが，本研究においては，該当者はいなかった。

② The Self-Esteem Instability Scale（Raes & Van Gucht, 2009）

The Self-Esteem Instability Scale尺度はRaes & Van Gucht (2009)の作成したものを日本語に翻訳し，用いた。この日本語の翻訳の際にはRaes氏に尺度使用の許可を求め,許可を受けて行った。翻訳会社に依頼し，まずオランダ語から日本語への翻訳を行った。その日本語翻訳されたものをオランダ語に翻訳するために，異なる翻訳会社に依頼した。日本語からオランダ語に翻訳していただいた尺度をRaes氏にe-mailで送信し，フィードバックをいただいた。そのフィードバックを参考に日本語の修正を数回加え，原著者に確認してもらった。この尺度では，自分の自己評価が変動しやすいと思っているかどうかの変動認知をはかることができる。回答方法は，各項目につき「非常によくあてはまる」「よくあてはまる」「まあまああてはまる」「ほんの少しあてはまる」「全くあてはまらない」の5件法で，それぞれの得点を1－5点とした。その合計得点が高い人ほど自尊感情が変動しやすいということになる。

③ 自尊心尺度（山本・松井・山成，1982）

自尊心尺度は全10項目からなる山本・松井・山成(1982)の作成したものを用いた。回答方法は各項目につき,「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらでもない」「ややあてはまらない」「あてはまらない」の5件法でそれぞれの得点を1－5点とした。その合計得点が高い人

ほど自尊心が高いということになる。ただし，因子への負荷が極端に低かった項目番号８「もっと自分自身を尊敬できるようになりたい」を除いた計９項目の合計点を自尊感情得点とした。

前述の尺度を２週間の期間をあけ，再度，測定した。また，１回目，２回目のアンケートどちらのアンケートでも，最後に“最近うれしかったこと”を記入してもらい，ポジティブな気分でアンケートを終了してもらえるように配慮した。

結果

各得点の最小値・最大値・平均値・標準偏差を記述統計としてTable1に示した。

先行研究に基づき,ネガティブな反すうを２因子（「ネガティブな反すう傾向」,「ネガティブな反すうのコントロール不可能性」），自尊感情高低を１因子，自尊感情変動を１因子として，それぞれの因子ごとにTime1とTime2でそれぞれ信頼性の分析を行った。「ネガティブな反すう傾向」がTime1で $\alpha = .879$，Time2で $\alpha = .889$,「ネガティブな反すうのコントロール不可能性」がTime1で $\alpha = .740$，Time2で $\alpha = .733$，自尊感情高低がTime1で $\alpha = .832$，Time2で $\alpha = .741$，自尊感情変動性がTime1で $\alpha = .788$，Time2で $\alpha = .812$ であった。この結果から,ある程度の信頼性を得たと判断した。

各変数間の相関を検討するため，Pearsonの相関分析を行った。その結果，自尊感情の変動性は自尊感情と非常に弱い負の相関がTime1では見られたが（$r= -.18$, $p<.05$)，Time2では見られなかった。一方で，Time 1において自尊感情の変動性はネガティブな反すう傾向ともネガティブな反すうのコントロール不可能性とも相関が示された（それぞれ $r= .31, p<.01, r= .16, p<.05$ ）。同様にTime1において，自尊感情もネガティブな反すう傾向ともネガティブな反すうのコントロール不可能性とも負の相関がみられた（それぞれ $r= -.35, p<.01, r= -.35, p<.01$ ）。

次に，自尊感情変動性とネガティブな反すう傾向との関連を検討するため，①Time1の自尊感情変動性とTime1のネガティブな反すうにおける回帰分析を行った。

① Time1の自尊感情変動性とTime1のネガティブな反すうにおける媒介分析

Time1の自尊感情変動性とTime1のネガティブな反すうにおける媒介分析の結果は自尊感情変動性とネガティブな反すうには有意な相関が見られた。

次にTime1の自尊感情変動性を調整変数，Time1の自尊感情を媒介変数とする分析を行った。その結果，Time1自尊感情変動性からTime1の自尊感情へのパス効果作用が有意（β =-.15, $p < .01$）であった（Figure1)。自尊感情変動性は直接的にネガティブな反すうに影響を与え，また，自尊感情変動性は自尊感情を媒介しながらネガティブな反すうにも影響を与えることが示された。

次に自尊感情変動性とネガティブな反すうのコントロール不可能性との関連を検討するため，Time1自尊感情変動性を調整変数，Time1自尊感情を媒介変数とする分析を行った。その結果，Time1自尊感情変動からTime1コントロール不可能性へのパス効果作用（β = -.15, $p < .01$）が有意であった。(Figure2) その結果，自尊感情変動性が低いほど自尊感情を低下させ，ネガティブな反すうのコントロール不可能性を高めることが分かった。なお，自尊感情変動性と自尊感情の位置を互いに入れ替えた場合，十分な標準化係数は得られなかったため，本研究の結果を採用している。

② ネガティブな反すうと自尊感情高低およびその変動性との関連についての交差遅れ効果モデル（Figure3）

このモデルの分析において，Figure3に示された結果が得られ，これを最終モデルとした。各説明変数の標準偏回帰係数をFigure3に示した。モデルの適合度はCFI=.998，GFI=.979，AGFI=.938，RMSEA=.034であり，適合度は十分であった。標準偏回帰係数を見ると，Time 1自尊感情変動性はTime 2自尊感情変動性に有

Table1　各変数の記述統計量

	最小値	最大値	平均値	標準偏差
Time1 自尊感情変動性合計	4.00	20.00	11.22	3.13
Time1 自尊感情高低合計	13.00	41.00	27.76	6.18
Time1 ネガティブな反すう傾向合計	7.00	41.00	23.99	7.31
Time1 ネガティブな反すうのコントロール合計	4.00	23.00	13.05	3.88
Time2 自尊感情変動性合計	4.00	20.00	11.15	3.22
Time2 自尊感情高低合計	10.00	43.00	27.92	6.41
Time2 ネガティブな反すう傾向合計	7.00	41.00	23.22	7.30
Time2 ネガティブな反すうのコントロール合計	4.00	22.00	12.90	3.52

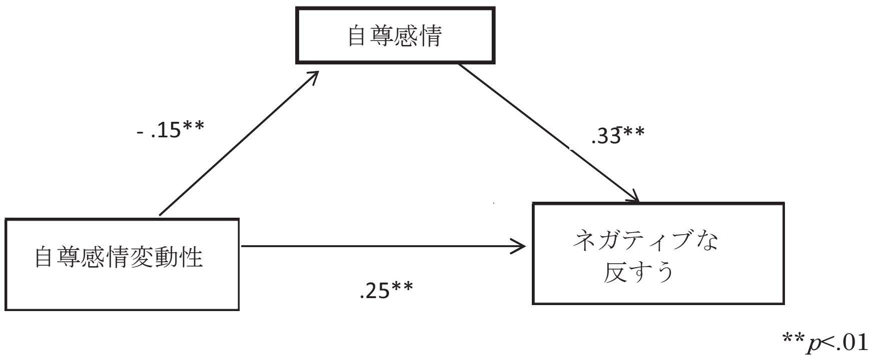

Figure1　自尊感情の変動性を調整変数，自尊感情を媒介変数としたネガティブな反すうに対する作用

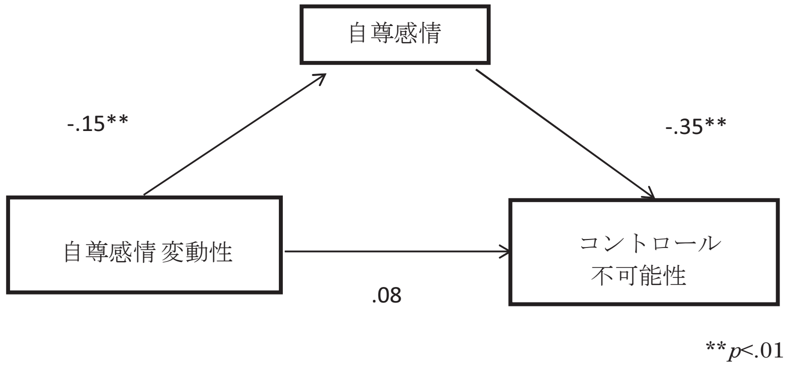

Figure2　自尊感情の変動性を調整変数，自尊感情を媒介変数としたコントロール不可能性に対する作用

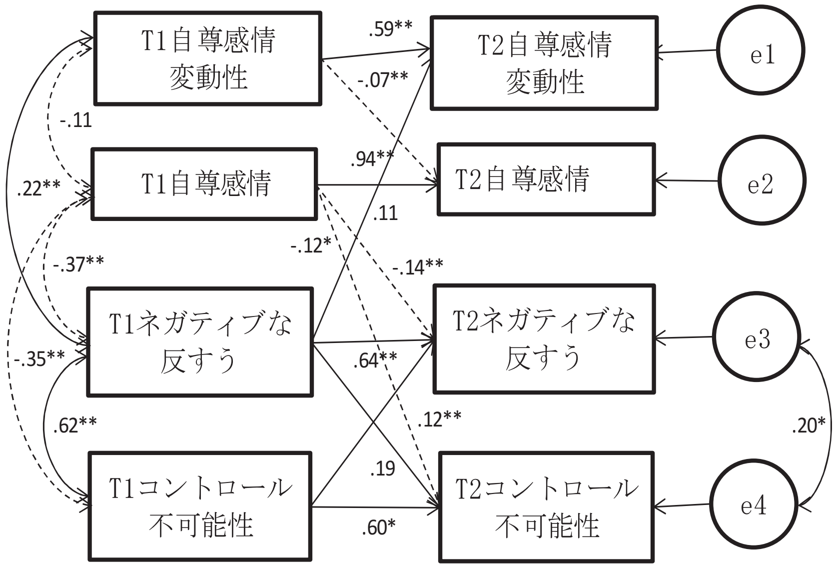

Figure3　自尊感情の変動性、自尊感情、ネガティブな反すうに関する交差遅れ効果モデル

注）表中には有意なパスのみを表記
実線が正、点線が負を示す
T1･･･Time1、T2･･･Time2 を示す

意な正の影響を，Time 2 自尊感情に対して有意な負の影響を与えていた。Time 1 自尊感情は，Time 2 自尊感情に有意な正の影響を，Time 2 ネガティブな反すう傾向，Time 2 ネガティブな反すうコントロール不可能性に有意な負の傾向が示された。また，Time 1 ネガティブな反すう傾向は，Time 2 自尊感情の変動性，Time 2 ネガティブな反すう傾向および，Time2 ネガティブな反すうのコントロール不可能性に対して有意な正の影響をもたらしていた。そして，Time 1 ネガティブな反すうのコントロール不可能性は Time 2 ネガティブな反すう傾向，Time 2 ネガティブな反すうのコントロール不可能性に正の有意な影響を与えていた。

考察

本研究の目的は，大学生を対象として自尊感情およびその変動性がネガティブな反すうとどのように関連しているのかを検討することであった。その際，①「自尊感情変動性が高いと，ネガティブな反すうを引き起こしやすいだろう」と②「自尊感情が低いと，ネガティブな反すうを引き起こしやすいだろう」を仮説とした。2 週間の期間をあけて Time1 と Time2, 合計 2 回の測定を行った。媒介分析において,「自尊感情変動性」から「ネガティブな反すう傾向」に有意な正の影響があったことから，自尊感情変動性がネガティブな反すうを導くことが示された。よって仮説①は支持された。自尊感情の変動性が高い人は出来事への感受性が高く，悪い出来事はより否定的にとらえ，その日の感情に影響を及ぼし，そしてその感情が自尊感情に影響を与えている（中間・小塩, 2007)。以上から，自尊感情の変動性の高い人は悪い出来事が起きた際にその出来事をより否定的にとらえるために，その出来事をさらに受け入れがたいものととらえている可能性がある。そして嫌な気分を持続させているうちに自分自身に自信をなくし，自尊感情を低下させることでさらにネガティブな反すうを引き起こしている可能性が示唆された。

次に仮説②「自尊感情が低いと，ネガティブな反すうを引き起こしやすいだろう」について,「自尊感情」と「ネガティブな反すう傾向」に有意な負の相関があり，共分散構造分析においても「自尊感情」から「ネガティブな反すう傾向」と「ネガティブな反すうのコントロール不可能性」へ有意な負の影響を与えていることが明らかとなった。したがって，仮説②についてもおおむね支持されたと言えるだろう。

自尊感情と自尊感情の変動性についての関連については,相関分析において「自尊感情」と「自尊感情変動性」には有意な負の相関は見られたものの，その相関係数は非常に弱かった。また，共分散構造分析においては「自尊感情高低」から「自尊感情変動性」への影響は見られなかった。しかし，媒介分析と共分散構造分析においては「自尊感情変動性」から「自尊感情」への影響が見られ，自尊感情変動性が自尊感情を低下させる可能性が示された。また媒介分析や交差遅れ効果モデルの結果を勘案すると，自尊感情変動性が自尊感情を低下させ，その影響がネガティブな反すう傾向を高め，ネガティブな反すうのコントロール不可能性を低下させているという可能性も示唆される。こうした影響性については今後も検討していく必要があるが，こうした自尊感情の影響もまたネガティブな反すうに影響を与えているのだと推察される。

最後に本研究の問題点および今後の課題について議論する。本研究において自尊感情がネガティブな反すうに影響を与えているという知見が得られた。自尊感情の変動性がネガティブな反すう傾向，ネガティブな反すうのコントロール不可能性に影響を与えていることが示されたが，ネガティブな反すうのコントロール不可能性への影響については媒介分析においても共分散構造分析においても比較的弱い影響であった。また，共分散構造分析においても，自尊感情変動性からネガティブな反すうのコントロール不可能性へは Time1 から Time2 への直接のパスは見られなかった。そして Time1 自尊感情が Time2 ネガティブな反すうコントロール不可能性を低下させるという影響は見られたが，こちらもさほど強い影響ではなかった。よって，ネガティブな反すうのコントロール不可能性には自尊感情やその変動性以外に影響を与える要因があることが推察された。そのため，ネガティブな反すうのコントロール不可能性に影響を与えている要因については今後さらに検討していく必要があるだろう。

なお，本研究では調査対象者がある一つの大学の大学生に限定されているために，本結果が複数の大学の大学生，あるいはほかの年齢層の人にも適応するかは不明である。調査対象者をさらに広げて検討していく必要があるだろう。

本研究では，ネガティブな反すうと自尊感情との関連や影響について明らかになった。自尊感情の変動性については，他者からの評価に不安や期待を抱くことによって，自尊感情が不安定になる可能性（市村，2011）や，自己愛傾向の下位尺度である「注目・賞賛欲求」が自己像の不安定を媒介して，日常の自尊感情の変動性に影響を与える（小塩，2001）ことが分かっており，自尊感情の変動性を抑制するには，他者からの注目や評価を期待せず，他者からの評価に左右されないはっきりとした自己像を形つくっていくことが大切である。とはいっても，青年期というのは自己像が変化しやすく，他者の評価を気にし，ネガティブな出来事を思い返し，ネガティブな反すうをしてしまうこともあるということは決しておかしなことではない。溝上（2008）によると，自己像とは他者の視点にポジショニングして世界を見るような構図が発達的に成立してきて，あるときその眼差しがふっと自分に向けられる瞬間に把握されるものであると述べら

れている。ポジショニングというのはさまざまな人やモノを自分なりに位置づけようとするプロセスを理解する概念である（溝上, 2008)。つまり，他者の世界観を理解し，他者の立場から自分自身を見つめることで自己像が形成されるということである。すなわち，他者からの評価や賞賛などから自分以外の人の価値観を理解し，それを踏まえた上で，自分自身を客観的に見つめなおすことが自己像を形作っていくことにつながるのだろう。そうしたプロセスにおいて，人々が思春期から青年期にかけて他者の価値観を理解しようとするために，周りの評価が気になり，自己像が変動しやすくなるということは一般的な発達のプロセスでもあるといえる。したがって，他者からの評価に左右されないためには，様々な人の考え方やものの見方を学び，はっきりとした自己像を形つくっていくことといえるが，そのプロセスでは「自己像の揺れ」が生じる可能性も大きいだろう。今後も，発達的要因を踏まえた上で，人々のストレスコントロールに役立てるような多方面からの実証研究が求められている。

引用文献

Adolson, J., & Doehrman, M. J. 1980 *The psychodunamic approach to adolescence*. Handbook of adolescent psychology. New York: John Wiley & Sons.

Baumeister, R. F. 1998 The self. InD. T. Gilbert, S. T. Fiske, &G, Lindzey (Eds.) *The handbook of social psychology. 4th ed.* Vol.1.New York:McGraw-Hill. pp. 680-740.

Baumeister, R. F., Bushman, B. J., & Campbell, W. K. 2000 Self-Esteem, Narcissism, and Aggression. Does Violence Result From Low Self-Esteem or From Threatened Egotism? *Current directions in Psychological Science,* 9, 26-29.

長谷川晃・根建金男 2011 抑うつ的反すうとネガティブな反すうが抑うつに及ぼす影響の比較 パーソナリテイ研究, 19, 270-273

樋口友里 2008 青年の「立ち直り」に関する研究―ネガティブな反すう傾向と信頼感の視点から― 日本青年心理学会大会発表論文集, 16, 56-57.

藤野陽生 2011 抑うつと不安におけるネガティブな反すうの影響―共変関係を統制して― 日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集, 20, 164.

市村（阿部）美帆 2011 自尊感情の2側面と低下後の回復行動 心理学研究, 82, 362-369.

市村美帆 2012 自尊感情の変動性の測定手法に関する検討 パーソナリティ研究 20, 204-216.

伊藤正哉•小玉正博 2005 自分らしくある感覚（本来感）と自尊感情が well-being に及ぼす影響の検討 教育心理学研究, 53, 74-85.

伊藤 拓・上里一郎 2001 ネガティブな反すう尺度の作成およびうつ状態との関連性の検討 カウンセリング研究, 34, 31-42.

伊藤 拓・上里一郎 2002 ネガティブな反すうとうつ状態の関連性についての予測的研究 カウンセリング研究, 35, 40-46.

Kernis, M.H 2003 Toword a con ceptual- ization of optimal self-esteem *Psychology inquiry*, 1-26.

Kernis, M.H, Grannemann，B. D. & Mathis, L. 1991 Stability of Self-Esteem and Depression *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 80-84.

北村譲崇 2011 青年期における自尊感情の変動性と関係的自己の可変性との関連 人間・環境学 京都大学大学院人間・環境学研究科, 20, 1-11.

松本麻友子 2009 反すうに関する心理学的研究の展望－反すうの軽減に関連する要因の検討－ 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科, 55, 145-158.

溝上慎一 2008 形成の心理学―他者の森をかけ抜けて自己になる― 世界思想社

中間玲子・小塩真司 2007 自尊感情の変動性における日常の出来事と自己の問題 福島大学研究年報, 1-10.

Nolen-Hoeksema, S. 2014 The response styles theory. In C. Papageorgiou&A.Wells(Eds.), *Depressive rumination:Nature,theory, and treatment*. UK:John Wiley&Sons. pp.107-123

及川 恵・林 潤一郎 2010 気晴らし方略が問題解決に及ぼす影響―大学生の学業ストレス場面における検討― パーソナリティ研究 19, 170-173.

Orth, U., Robins, R. W., & Roberts, B. M 2008 Low Self-Esteem Prospectively Predicts Depression in Adolescence and Young Adulthood. *Journal of Personality and Social Psychology*, 3, 695-708.

小塩真司 2001 自己愛傾向が自己像の不安定性，自尊感情のレベルおよび変動性に及ぼす影響 性格心理学研究, 10, 35-44.

Peter M.McEvoy, Hunna Watson,Edward R.Watkins, Paula Nathan 2013 The relationship between worry,rumination, and comorbidity:Evidence for repetitive negative thinking as a transdiagnostic construst *Journal of Affective Disorders,* 151, 313-320.

Raes, F. 2010 Rumination and worry as mediators of the relationship between self-compassion and depression and anxiety *Personality and Individual Differences*, 48. 757-761.

Raes, F & Van Gucht, G. 2009 Paranoia and instability of seif-esteem in adoles- cent. *Personality and Individual Differences* 47, 928-932.

齋藤路子・今野裕之 2009 ネガティブな反すうと自己意識的感情および自己志向的完全主義との関連の検討

パーソナリティ研究, 18, 64-66.
諏訪典子・緒賀郷志　2012　自尊感情の変動性が大学生の被害妄想的観念に及ぼす影響　岐阜大学教育学部研究報告　人文科学, 61, 99-109.
山本真理子・松井　豊・山成由起子　1982 認知された自己の諸側面の構造　教育心理学研究, 30, 64-69.

（2014年 9 月 1 日受付）
（2014年10月 8 日受理）